

「手島さんの偲ぶ会へのメッセージ」より。

手島さんと美ヶ原高原

石塚秀雄

手島さんは古代マケドニアのアレクサンダー大王のような顔をしていると、私は会うたびに思ったものだ。アリストテレスから教わっているのと同じ人のような知的で威厳のある顔である。いつだったかある日近くまで来たからといって、信州安曇野の我が家に立ち寄られた。私は手島さんを誘って美ヶ原高原にドライブに行った。当時私は「美ヶ原高原の自然を守る会」の会員だったのである。季節は六月だったか、少し雲があったので、もしかしたらなにも見えないかもしれないと心配したけれども、北アルプスをなんとか一望できたので私はほっとした。手島さんはその立派な横顔をもって、山頂付近の冷たい風の中で、しばし美ヶ原高原からの全景を眺めていた。その後しばらくして年賀状だけの挨拶になってしまったが、手島さんが亡くなられたことを知って、同じ年の私としては感慨深いものがある。

手島繁一さんを偲んで

鷺谷 徹(わしたに てつ 中央大学名誉教授)

私が手島繁一さんと知り合ったのは40年以上前、現代労働問題研究会という若手研究者の研究会においてです。同研究会は当初、東大、早稲田大の学生・院生を中心に組織され、私は初期のメンバーだったのですが、次第に輪が広がっていき、法政大、専修大の院生も参加するようになり、手島さんもその一人でした。毎月1回の研究会で、多いに学び、多いに論じ、多いに呑んだものでした。手島さんはいつもカッコよく、かつ鋭く論じていたことを覚えています。同研究会は1990年代に活動を終えますが、その後も、学会などでの交流は続きました。

手島さんと最後にお目にかかったのは2023年12月13日に行われた、東大闘争の天王山の一つであった55年前の同日開催された東大駒場代議員大会を記念するシンポジウムの会場でした。私は当事者の一人として参加し、手島さんも遠路はるばる駆けつけてくれました。久しぶりの邂逅に大いに感激したものでした。また、小生は北海道日高地方で、毎年フィールドワークをしていることもあり、そこでの再会を約して別れました。それから1年足らずでの悲報、残念の極みと言わなければなりません。手島さんの思いをどれだけ引き継ぐことができるかわかりませんが、労働問題研究者として、もう少し言論活動を続けるつもりであります。手島さんのご冥福をお祈りしつつ。

飯島信吾（インターネット事業団代表）

手島さんと最初にお酒を飲んだのは、1990年代初頭の「出雲の事業団総会」の時、「協同総合研究所の常任理事」と紹介されたので、みんなで歓迎会をしたのを覚えている。

入所してからは、少なくない文章を『協同の発見』誌に足跡を残している。

<http://www.e-kyodo.sakura.ne.jp/tejima/index.html#kyodo250322-1>

その後、彼が担当したのは、「ホームページの開発（G I C R・O R G通信協同総合研究所のWEB）」だった——2001年2月～。

<http://www.e-kyodo.sakura.ne.jp/tejima/index.html#kyodou250305-4>

私は1970年前後、中林賢二郎先生（法政大学社会学部）の「どうどうめぐり研究会」に学生時代から参加し、手島さんが法政大学大学院社会学研究科に入学してきたときには、労働旬報社編集部にいたので、名前を聞いていた。

研究所の時期に覚えているのは、あまり発言をしなかった姿の割には、有志が集まった「荻野目会」（ILO東京事務所、荻野目洋子さんのお父さん）というグループが主催した飲み会、花見会、温泉探索では率先して企画していたことだった。

「北海道」帰郷後、手島さんが編集した『蒼空に梢つらねて、イールズ闘争60周年・安保闘争50周年の年に、北大の自由・自治の歴史を考える』（2011年2月）本をWEBに載せましょうと、話したことから「手島繁一のページ」を編集・制作してきたが、中座せざるを得ないことになりました。

<http://www.e-kyodo.sakura.ne.jp/tejima/index.html>

インターネット事業団 <http://e-kyodo.sakura.ne.jp/>

人生の最良の友・手島繁一さん 木下武男（労働問題研究者・元昭和女子大学教授）

一九七二年、手島さんが法政大学の大学院に入ってきた。大学院は社会学部系であり、法政の社会学部は労働者教育の中央労働学園を引き取ってできた。だから、ほとんどが左翼系の教員だった。院生もそこで学びたいために入ってきた。だから、手島さんが全学連の委員長だったことは知っていたが、特別視はされず、彼も自然にとけこんでいた。

私は彼と気が合った。彼がよく言う「機敏な判断、素早い行動」のように、彼は判断が速く、また喜怒哀楽も抑えつつも率直に気持ちをだす方だった。当時、社会労働運動の六〇年代の高揚も終わり、ソ連・東欧の社会主義も崩壊した。激変の時代だった。議論はつきなかった。よく飲み、よく議論をした。

また、大学院の生活は、激しい学生運動の毎日をおくった者にとって、ぼっかり現れたゆとりある時期でもあった。手島さんとはよく「室内遊戯」やテニス、スキーを楽しんだ。独り身の手島さんはよく我が家に泊まった。

息子が小学校低学年のころ、朝起きると「手島おじさん、泊まったんだ」といい、学校に行った。彼が学校から帰ってきててもまだいる。しかも、次の日も泊まる。飲み話した後の二泊三日の滞在だった。

手島さんは札幌に戻り、結婚した。その間とはときどき東京に来たとき会う程度になった。その彼も独り身になってしまった。私は、人生最後の方は、また手島さんと一緒に飲み食い、しゃべることになるだろうと、勝手に思っていた。手島さんに「東京に戻ってきなよ」とよく言っていた。昨年の夏にもそういった。彼は「うーん」と答えた。それが彼の最後の言葉だった。人生の最良の友を失った。

乾彰夫 元全学連中央執行委員・東京都立大学名誉教授

手島さんに初めてお会いしたのは全学連中央執行委員会の場でした。その後、手島委員長時代を含めて1年半あまりを全学連書記局メンバーとしてご一緒しました。手島さんが委員長を務められた時期は、早乙女さん、松尾さん、西田さんら68-9年の大学闘争を指導した多くのメンバーが退任したあとで、また書記局が困難な事態に直面していた、特段の苦勞の多い時期でした。

全学連退任後、法政大学大学院に進学され、同大学社会学部非常勤講師をされていた頃、ちょうど私も法政大学文学部に勤めるようになり、授業の合間などに講師室でしばしば顔を合わせるようになりました。学期の終わりに一緒に打ち上げをしたり、夜行バスでスキーに行ったり（お互い若かった）、いろいろ楽しい思い出もあります。札幌に戻られて以降も、私が訪札のたびに、一緒に飲むなどの機会を設けていただきました。

東大闘争50年を契機に当時のメンバーで当時の資料収集をはじめましたが、その際には『北大1969』など手島さんのお仕事には、大いに励まされました。一昨年12月、私たちの資料収集報告会に札幌からおいでいただき、翌日に本郷3丁目のレストランで昼食をご一緒したのが最後になってしまいました。『北大院生協議会史』出版記念会にお招きいただき、そこでお会いできると楽しみにしていたところに突然の訃報、言葉を失いました。安らかにお休みください。今ごろ、奥さまとご一緒でしょうか。

わが友・手島繁一さんの思い出

法政大学名誉教授 五十嵐 仁

最初の出会

法政大学大学院への進学を目指して社会科学研究科社会学専攻の合格発表を見に行った時のことです。自分の名前を発見して喜んだ私の目に、見慣れたもう一つの名前が飛び込んできました。「手島繁一」と書かれています。「まさか、あの手島さんなのか？」と驚きました。（次ページへつづく）

手島さんが法政大学の大学院を受験するなんて思いもありませんでした。しかも、入学してからは同じ中林賢二郎先生のゼミに属することになるなんて。もちろん、手島さんの名前は全学連委員長として以前から知っていました。私も大学1年生で都立大学A類目黒学生自治会の副委員長、2年生の時には委員長をやっていましたから。

でもそれは、集会などで遠くから仰ぎ見る程度のことでした。直接、顔を合わせて話した記憶はありません。その元全学連委員長が大学院での「同級生」となったのです。

しかし、その後も手島さんが姿を現すことはありませんでした。大学院学友会（自治会）の委員長となった私は、先輩に指示されて迎えに行くことになりました。下宿は戸越銀座のはずれにあったと思います。言葉を交わしたのは、その時が初めてでした。

それは1974年4月末のことです。以来、昨年末に急逝されるまでの50年の間、私たちはしばしば行動を共にし、飲み会などでの同席は数知れません。手島さんとは半世紀にわたってほとんど途切れることなく交遊が続くことになりました。

中林ゼミで

こうして、私と手島さんは中林ゼミでの同輩となりました。田沼肇・増島宏・高橋彦博・芝田進午・湯川和夫・江口朴郎・北川隆吉などの諸先生のゼミにも一緒に顔を出していたはずですが、授業での記憶はほとんどありません。しかし、それが終わってからの思い出は山のようにあります。

ゼミでも一緒に行った合宿などについては覚えています。千葉県の外房では海岸の岩の上で遊んだり、駒ヶ根で合宿して近くの千疊敷カールから宝剣岳に登ったりしました。東京でも奥多摩の御岳山の宿坊で合宿し、清里では飯盛山に登りました。どれも懐かしく楽しい思い出ばかりです。

中林先生宅での新年会なども楽しく思い出されます。中林先生がガンで急逝された後のゼミを引き継いだのが手島さんで、その後を私が受け持ちました。追悼文集『追憶 中林賢二郎』には、手島さんと私の連名で書いた「国際社会労働運動史研究について」が収録されています。

近畿大学での政治学会に参加した時のことです。懇親会で隣から出てきた手と養殖マグロの刺身を取り合う形になりました。それを見ていた手島さんが、後になって「あれ、丸山眞男だぜ」と言うのです。生前の丸山先生にお会いしたのは、あの時だけでした。

2人して遊びまわり、帰れなくなって先輩や後輩などに泊めてもらうこともありました。木下武男さん（のち昭和女子大学教授）、丸谷肇さん（のち鹿児島国際大学教授）、垣内国光さん（のち明星大学教授）など、新婚ほやほやのお宅にお邪魔して泊まったこともあります。今から考えれば、さぞ迷惑だっただろうと反省しています。

中林先生がイギリスでの留学から帰国され、手島・木下・私の3人で成田空港まで出迎えに行った時のことです。喜んだ先生は土産に持ち帰ったスコッチのモルト・ウイスキー「グレンフィデック」をくださいました。

我々は早速、味見をしようと手島さんの下宿だった立川の「タンポポ荘」に行って宴会を始めたのです。手島さんは「せっかくだから。黨も呼んでやろう」と言い出しました。近くに住む後輩の黨高敏君に電話して呼び出したのは良かったのですが、彼が駆け付けたときには、すでにウイスキーは空っぽになっていました。黨君は不平たらたらでしたが、「わりー、わりー」と頭をかく手島さんが相手では喧嘩にならないのです。

大原社会問題研究所での協働

大学院修了後、私は大原社会問題研究所の兼任研究員に採用されました。その後、助教授として専任研究員となり、やがて所長として勤務することになります。ここでも手島さんと一緒に働く機会がありました。私が研究所の業務として編集を担当していた『日本労働年鑑』を手伝ってもらったことになったからです。

『年鑑』巻末の「社会・労働運動年表」の「社会運動欄」の年表作成と本文の「社会運動の状況」の執筆をお願いしました。締め切り通りに原稿が出てくることはほとんどありませんでしたが、ぎりぎりで見計らったように送られてくるのです。

研究所の一大事業として取り組んだ『社会・労働運動大年表』（労働旬報社）の「執筆者一覧」にも手島さんの名前が掲載されています。その後、私が編集責任者を務めた『社会労働大事典』の執筆にも加わっていただきました。全学連委員長としての実践経験もあり、社会運動についての目配りとバランス感覚は抜群でした。

仕事だけではありません。研究所の仲間とマイクロバスを仕立てて行ったバス・ハイクなども楽しい思い出です。手島さんが慶子さんと結婚されたとき、「お祝い」にと山梨の新府桃源郷までマイクロバスで出かけましたが、時期が早すぎて桃の花は全く咲いていませんでした。雨も降りだして寒さに震えながら近くの温泉に入って帰ってきたものです。

手島さんに頼まれて、足立区長選挙で吉田万三候補の応援にも行きました。春休みには、新潟の私の実家に遊びに来たこともあります。木下一家などと共に田代スキー場までスキーにも行きました。流石にうまいものだと感心するような見事な滑りでした。

登山の思い出もあります。雪の高尾山から陣馬山まで縦走し、陣馬の湯で宴会をしました。北アルプスの唐松岳から不帰の嶮を通して白馬三山を經由し蓮華温泉まで3泊4日の山行では、途中の「天狗の太下り」で滑落しそうになって危ないところを助けてもらったこともあります。

北海道に帰った後も

手島さんが生まれ故郷の北海道に引き上げたのちも、私たちの交遊は続きました。講演などを頼まれて北海道に行くたびに手島さんや共通の友人である山本補将さん（専修大学北海道短期大学教授）に連絡を取り、一緒に一杯やったり出かけたりしたからです。

山本さんの運転で、水が自噴している京極の「羊蹄のふきだし湧水」に案内していただいたことが2回あります。1回は私の妻も一緒でした。手島さんと定山溪温泉に宿泊して一緒に大きな温泉に入りました。

芹澤寿良さん（元高知短大学長代理）、山本さんと4人で「天人峡温泉」に泊まり、ロープウェイで旭岳に上ったこともあります。妻と行くはずだったバス旅行の都合が悪くなり、手島さんに声をかけて積丹半島を一周したとき、「これを積丹ブルーというんだよ」と教えてもらいました。一緒に塩水ウニに舌鼓を打ったのも懐かしい思い出です。

2018年11月に北海道革新懇から講演を依頼されました。早速、手島さん・山本さんと連絡を取り、札幌郊外の水源地周辺や中島公園での紅葉見物に案内していただき、その後は市内で一杯やり、楽しい時を過ごしました。

2019年3月に佐方信一さんが亡くなりました。労働旬報社の元社員で『労働年鑑』の編集を担当していた親しい友人の1人です。たまたま大原社会問題研究所の創立100周年

記念のシンポジウムがあり、佐方さんの弔いを兼ねて手島さんが上京され、佐方宅を弔問に訪れたのち木下宅で追悼し献杯しました。

2022 年 1 月に全商連札幌連合会の旗開きに招かれたときも前日にお会いし、翌日の講演を山本さん親子とともに聞きに来てくれたこともあります。その翌年の 11 月に私が講演で岩見沢を訪れたときにも札幌でお会いし、手島さんに北大の紅葉の名所を案内してもらい、所々で北大闘争の思い出についてお話を伺いました。

その年の 12 月にお会いしたのが、最後の機会となりました。東京で学生運動時代についてのシンポジウムがあつて上京され、木下さん宅で一杯やりました。その翌日に八王子の我が家に泊まっています。これが手島さんとの半世紀にわたる交遊の最期となるなんて、思いもよりませんでした。

今はただ、冥福を祈るのみ

手島さんとの思い出は尽きません。書かなかったこともたくさんありますが、これくらいにしておきましょう。

私より 3 歳の年上でしたが、兄貴というより同輩という感覚です。年の差を感じさせないフランクさで付き合えた人でした。明るくカラッとしており、一緒にいて嫌な思いや気まずさを感じたことはありません。専門がイタリア政治だっただけに、本人も「ラテン気質」だったように思います。

多少アバウトなところもあり、遅刻したりしても憎めない人でした。遅刻といえば、私の米ハーバード大学留学中に手島・芹澤・佐方・川崎さんの 4 人で、四国旅行に出かけたそうです。この時、手島さんは遅刻して飛行機に乗り遅れています。また、研究所の仲間と一緒に高尾の桜保存林に出かけた時も遅刻し、途中でばったり出会ったということもありました。それも、今となつては懐かしい思い出となっています。

急逝の報に信じられない思いでいっぱいになりました。愕然とし果然とするばかりです。早すぎる逝去はまことに残念であり、孤独で寂しい最期となったことは無念でもあります。

ただ、今となつては生前の友誼と厚情に感謝し、「安らかにお眠りください」とご冥福を祈るばかりです。

5 花も実もある人間像(未完)

敬称略、(25、4.29 第一次稿)

石田嘉幸 元国労組合員・「西暦表記を求める会」事務局

私は手島さんより少し下の世代になります。手島繁一さんと出会ったのは、もう 30 年以上前、国鉄分割民営化反対闘争の「敗北」を受け、労働者協同組合への関心から、当時手島さんが常任理事を務めていた「協同総合研究所」の様々な会議に参加するようになったからでした。

法政大学の非常勤講師をしている、としか存じ上げないまま、物事について落ち着いて分析する声に重みを感じていました。1993 年 7 月に、花巻市で開催された「労働者協同組合と労働組合」の関係についての全国交流集会に参加した時には、集会終了後、一緒に宮沢賢治ゆかりの地を訪れ、翌日は早池峰山に登りました。あくせくと先を急ごうとする私に対して手島さんはゆっくりと一つ一つの花をじっくり観察しながら泰然と歩を進めて

いました。その折に買った宮沢賢治の描いたミミズクのペーパーウェイトは今も私の机上にあります。

研究所所報の「協同の発見」1993年9月号には手島さんの理事会・委員会報告と一緒に集会への私の感想文も掲載して頂きました。当時ご一緒した頃の経験や考えさせられたことは現在の私の基礎のひとつです。

その後、私は研究所からは離れましたが、手島さんとはずっと年賀状のやり取りを続けて頂きました。北海道に戻られての結婚、お連れ合いの御逝去、学生運動の資料まとめなどの仕事のご様子を拝読し、離れていても同じ時代を生きていることの実感を年賀状でつないでおりました。

今年は年賀状が遅いなと思っていた頃、弟さんから寒中見舞いの悲報をいただき、慌てWebで検索し、事情をのみ込みました。早池峰山を登ったときの着実な歩みはそのまま続いていて、死は全くその外部から突然訪れたにすぎないのだと思います。あの、彫りの深い顔立ちを研究所の若い友人は50m離れていても手島さんだと分かるよ、と冗談に言っていました。これからも、その面影を忘れることはありません。長い間ありがとうございました。

緑の美しい季節となりました。この度は夫も私も学生の頃から存じ上げております手島繁一さんの訃報をお知らせくださいます心から感謝申し上げます。

思えば2019年3月20日、大原社研100周年に上京された手島さんが、その日葬儀の佐方信一に参加できなかったと、翌日、五十嵐仁、佐伯哲朗、各先生方と一緒に手島先生も我家にお参りに来てくださいました。案内して下さったのが、法政の中林ゼミで一緒だった飯島信吾さんでした。

関係して思いますのは、中林賢二郎先生のゼミです。丁度大学院最終の頃、学院と大学のゼミ生が一緒になり話しあい等や木下家のお泊り会等があり、私も参加しました。佐方信一は旬報社で年鑑（社会労働年鑑）を創っていた関係で大原に参加しており、いつの間にか中林先生の紹介で・・・というわけです。青春時代からの、また後半になってからの（私としては）再会ではありましたが、手島様にも夫への追悼文を書いていただきましたので、参考までにお送りいたします。この本は大勢の方々のお力によるところ大ですが、飯島信吾さんと石井次雄さんに編集を手助けしていただいて出来ました。その飯島さんとは先日話をしました。6月1日に参加予定との事でしたが、私は足と腰を長く患っており、参加できませんので、心ばかりのものを送りいたします。

勝手なことを書きましたが、これも手島様への心と思って下されば幸いです。

どうぞ実行委員会の皆様によろしく。

尚、本は余分なものです。手島様の文章をコピーしようと思いましたが、共通の友人も多いので、それぞれの文もあり送ることに致しました。心置きいただきたく存じます。

どうぞ皆様、お体には十分気をつけられ、手島繁一様のために偲ぶ会が良い会となりますよう希っております。

2025.4.28 佐方三千枝